

喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

# 先山遺跡

1987年3月

鹿児島県大島郡喜界町教育委員会

## 序 文

わが喜界島は、新世代第三紀鮮新世の島尻層を基盤に琉球石灰岩、志戸桶層隆起珊瑚礁、砂丘の地層から形成された島です。

本町における埋蔵文化財の最初の発掘調査は昭和32年九学会によって行われ、荒木農道遺跡、巖島神社貝塚などいくつかが発見され、縄文後期の土器片（宇宿式土器）、石斧、貝器、骨器等が、また喜界高校校庭からは縄文前期の轟式土器に相似した土器片が出土しています。しかし、当時の出土品は、ほとんど本町には残っておらず、また、その後は先史解明のための調査もなされないまま、今日にいたっておりました。

そうした中で、今回、喜界中部地区畑地帯総合土地改良事業実施に伴い、「先山遺跡発掘調査事業」として、文化庁並びに県教育委員会の懇切な指導援助を得て発掘調査を実施することができました。

本書はその報告であります。この調査結果が土地改良事業実施にあたって適切に活用されるよう念願するとともに、文化財の保護に活用いただければ幸いです。

真夏の炎天下に大変なご尽力をくださった県文化課の調査員の先生方をはじめ、指導者、作業協力者及び協力いただいた地主の方々に厚く御礼申しあげます。

昭和62年3月31日

喜界町教育委員会教育長 折田国雄

## 例　　言

1. 本報告書は、県営畠地帯総合土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国、県の助成を得て、喜界町教育委員会が主体者となって実施した。
3. 本書の執筆は、戸崎勝洋、長野真一があたり。獸骨については西中川駿氏（鹿児島大学農学部助教授）の同定を得た。
4. 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。
5. 出土遺物は、喜界町教育委員会で、保管、活用している。

## 本文目次

### 序 文

### 例 言

第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	7
第Ⅲ章 発掘調査	14
第1節 調査の概要	14
第2節 層 位	14
第3節 遺構等	14
第4節 遺 物	23
先山遺跡出土の獸骨について	36
第Ⅳ章 まとめ	38

## 挿図目次

第1図 トレンチ配置図	5
第2図 先山遺跡及び周辺遺跡	11
第3図 先山遺跡の位置及び周辺地形図	13
第4図 トレンチ配置図 (1)	15
第5図 トレンチ配置図 (2)	16
第6図 トレンチ配置図 (3)	17
第7図 土層断面図 (1)	18
第8図 土層断面図 (2)	19
第9図 遺物及び珊瑚塊出土状況	21

第10図	8トレンチ出土遺物 (1) .....	23
第11図	8トレンチ出土遺物 (2) .....	24
第12図	9トレンチ出土遺物 .....	25
第13図	12トレンチ出土遺物 (1) .....	27
第14図	12トレンチ出土遺物 (2) .....	27
第15図	11トレンチ出土遺物 (1) .....	30
第16図	11トレンチ出土遺物 (2) .....	31
第17図	11トレンチ出土遺物 (3) .....	32
第18図	11トレンチ出土遺物 (4) .....	33

### 表 目 次

第1表	先山遺跡遺物観察表 8トレンチ (1).....	25
第2表	先山遺跡遺物観察表 8トレンチ (2).....	26
第3表	先山遺跡遺物観察表 12トレンチ.....	28
第4表	先山遺跡遺物観察表 11トレンチ (1).....	34
第5表	先山遺跡遺物観察表 11トレンチ (2).....	35

### 図 版 目 次

図版1	遺跡遠景・遺跡遠景.....	41
図版2	発掘風景・発掘風景.....	42
図版3	遺跡近景・土層断面.....	43
図版4	土層断面・遺物及び珊瑚塊出土状況.....	44
図版5	遺物出土状況・遺物出土状況.....	45
図版6	遺物出土状況・遺物出土状況.....	46
図版7	8トレンチ出土遺物 .....	47
図版8	12, 11トレンチ出土遺物 .....	48
図版9	11トレンチ出土遺物 .....	49
図版10	9, 11, 12トレンチ出土遺物 .....	50

# 第 I 章 調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会（以下県文化課）は、県下の市町村教育委員と連携し、文化財の保護・活用を図るために、開発関係各機関に対しては、工事着工前に当該事業区域内における文化財の有無、及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議に基づき、鹿児島県農政部農地整備課（喜界土地改良出張所）は、喜界町内において「県営畠地帯総合土地改良事業（喜界中部地区）」の計画策定に当たり、文化財の有無について県文化課に照会した。

県文化課はこれを受けて、昭和60年6月、当該地区の文化財分布調査を喜界町教育委員会社会教育課（以下町社会教育課）と実施した。

この分布調査の結果、4地点に土器の散布地を確認した。このため事業着工前に遺跡の範囲性格等を把握するため確認調査を実施することとなった。

発掘調査は、国及び県の助成を得て喜界町教育委員会が調査主体者となり、調査は県文化課に依頼した。

## 第2節 調査の組織

調査主体者 喜界町教育委員会

調査責任者	タ	教 育 長 折 田 国 雄
調査事務	タ	社会教育課長 太 利 博 美
	タ	・ 課長補佐 晴 岡 和 夫
	タ	社会教育主事 永 田 彬 也
	タ	社会教育指導員 横 岡 順 雄
発掘担当者	鹿児島県教育庁文化課	文化財研究員 戸 崎 勝 洋
	タ	主 査 野 真 一

発掘調査にあたっては、河口貞徳氏（鹿児島県考古学会長）の現地及び出土遺物の指導を受け、調査企画においては、鹿児島県教育庁文化課（課長桑原一廣、同補佐川畑栄造、同主幹中村文夫、同主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長立園多賀生、同企画助成係長浜松巣、同係）の各氏の指導・助言を得た。

## 第3節 調査の経過

発掘調査は、昭和60年6月に確認した事業区域内の埋蔵文化財包蔵地3地点のうち、工事計画で現況が削平される地点と、立地条件を加味して、2m×3mを基本としたトレンチを設定し、表土から順次掘下げることとした。

なお、基本トレンチによる発掘調査により、拡張の必要が認められた箇所については、任意に拡大し調査を続行した。

調査は、A地点より始め、順次B地点、C地点、D地点と移行し、調査終了後は埋戻しを行

い、現状に復した。

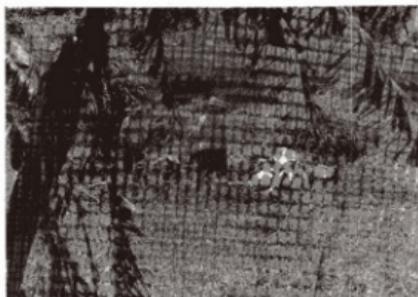
(日誌抄)

7月14日（月）奄美空港経由で喜界町に到着。町教委と調査について打合せ。用具点検、消耗品等調査。

7月15日（火）発掘開始。作業員に調査方法等説明。1, 2トレンチ設定、掘下げ。

7月16日（水）1, 2トレンチ掘下げ。表層より近世陶器片出土のほかは、遺構、遺物出土せず（1トレンチ）、2トレンチは表層直下は白砂で、遺物皆無。4トレンチ設定。

7月17日（木）台風余波のため午前中作業中止。4トレンチ掘下げ。遺物なし5トレンチ設定。



発掘風景

7月18日（金）5トレンチ掘下げ。表土下は、サンゴ塊混りの砂となり、遺構、遺物出土せず、猛暑となる。7トレンチ設定。

7月19日（土）7トレンチ掘下げ。遺構、遺物出土せず。8トレンチ設定のち拡張。白木原和美氏（熊本大学教授）来跡。

7月20日（日）作業中止。

7月21日（月）8トレンチ掘下げ。表土より若干の土器片出土したため、拡張部分も同時に掘下げを行う。土層は、I層が黒褐色粘質土、II層が淡茶褐色粘質土、III層は赤褐色砂質土（マンガンを含み固い）、IV層が砂層となる。



発掘風景

7月22日（火）8トレンチ掘下げ。2層上部より兼久式土器出土。トレンチ全面にサンゴ塊検出されたため精査。

7月23日（水）8トレンチ精査。

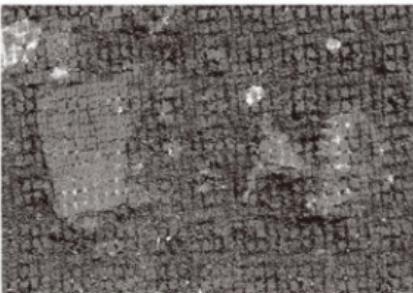
サンゴ塊は一見すると人工的であるが詳細は不明。

7月24日（木） 13トレンチ（2m×7m）設定。この地点は、分布調査で貝殻を採集し、貝塚の可能性のある地点であった。表層より順次掘下げ。

7月25日（金） 掘下げの結果、表層以下は、サンゴ塊混りの黒褐色土及び砂層となり、遺構、遺物皆無。貝殻は砂層中の自然浮遊物。

7月29日（火） 再び、奄美空港経由で喜界町着。9トレンチ設定、掘下げ。

7月30日（水） 9トレンチは表層



遺跡出土状況

より近、現代の小陶器片が出土したのみで、遺構、遺物検出されず。1～5トレンチ位置図平板測量

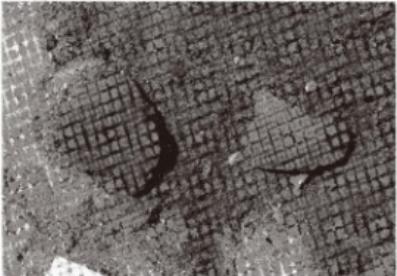
7月31日（木） 10トレンチ設定のち掘下げ。河口貞徳氏（鹿児島県考古学会長）、立園多賀生氏（県文化課、主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長）現地指導。

8月1日（金） 河口、立園氏現地指導。6～10トレンチ位置図平板測量。

8月2日（土） 11, 12トレンチ設定のち掘下げ。13トレンチ土層断面実測。

8月3日（日） 作業中止。

8月4日（月） 11トレンチより貝殻、土器片出土。1～9トレンチ土層断面実測。8トレンチ実測。

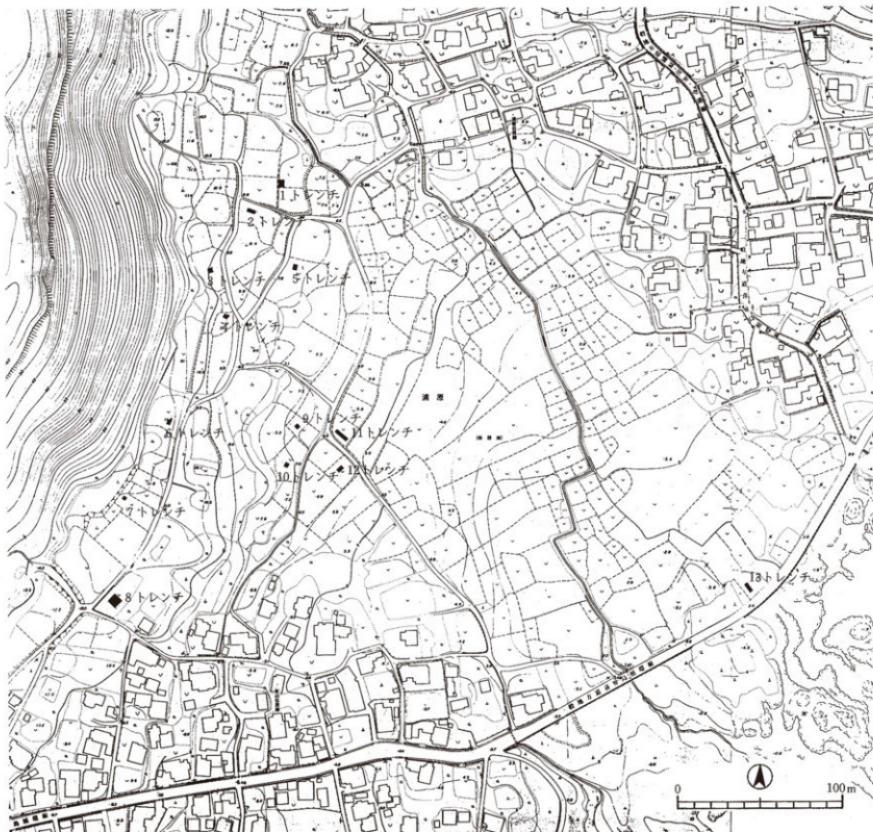


遺跡出土状況

8月5日（火） 11トレンチ遺物実測のち取上げ。10～12トレンチ土層断面、位置図実測。

8月6日（水） 各トレンチ埋戻し。

8月7日（木） 各トレンチ埋戻し。調査員帰鹿。



第1図 トレンチ配置図

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

先山遺跡は、鹿児島県大島郡喜界町先山に所在する。

遺跡の所在する喜界町は、鹿児島本土から約380km南の奄美群島の中の1つの喜界島に位置し、1島で1町をなしている。

喜界島は、奄美本島の東方およそ42kmに位置して、北東から南西にかけた細長い島で、長さ約14km、最大幅約8km、周囲は約48km、面積は約56km<sup>2</sup>を測り、南西部でしだいに幅を広げる。

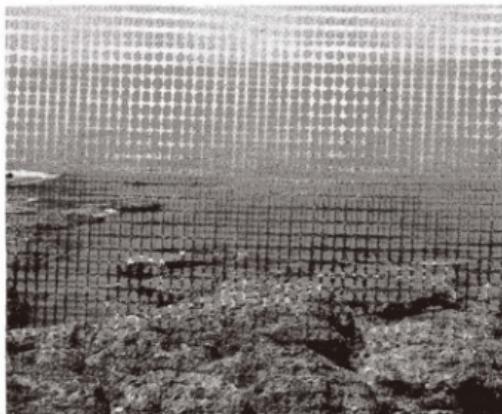
最高点は島の中央東側の百之台で標高224mの平坦な島で、北西側に緩やかに傾斜するが、東南部には急崖がみられる。

また北東および南西部には60m~10mのきわめて緩やかに傾斜して海に達する広い段丘地形がみられる。

このように喜界島は概して平坦な隆起珊瑚礁の島である。

河川の発達は乏しく、用水は湧水や地下水に依存している。

本島の基底をなすものは、新第三紀鮮新世に属する島尻層で、本層の上位には琉球石灰岩、志戸桶層、隆起珊瑚礁砂丘が上層を形成している。



珊 瑚 礁

気温は年平均23℃、年間を通じて温暖であり、降水量は年間2,100mmに達する。全島、ガジュマルをはじめとする各種の亜熱帯性植物が自生している。

土壌は島の大半を覆っている琉球石灰岩に由来する暗赤色土壌（マージ）が大部分の面積を占めている。

以上のような地形及び気候の本島は、1島1町の行政区界である。

喜界町は、大島郡に属し、早町村と喜界町に分かれていたが、1956年（昭和31）に合併して喜界町となった。

産業は、亜熱帯性気候を生かしたサトウキビ栽培が主で、近年スイカ等も作られるようになった。また伝統産業の大島紬も、島の重要な産業である。

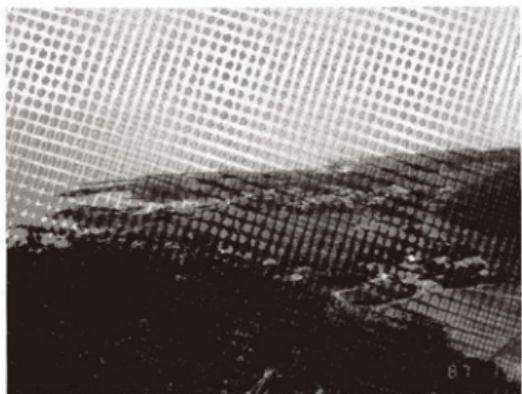
美しい珊瑚礁や砂丘等の海岸線は観光に役立っている。島外との交通は、奄美大島本島経由で、空路、海路とも連絡されている。

このような喜界島のうち、遺跡の所在する浦原、先山地区は、島の南東部に位置する。

浦原・先山地区の奥部の東、北および西の三方は、標高約80m～約145mの台地が、集落との比高差約70m～約135mをもった急崖となり、その脚部からはなだらかな傾斜をもった平坦な地形を保ちやがて珊瑚礁がとりまく海に達している。

このような地形のため、本島においては比較的低地に恵まれ、早くより水田耕作が行われていた。

集落は東側の浦原地区と西側の先山地区からなるが、早く浦原地区が開けたという。南部は東西に県道喜界島循環線が通り、同県道から浦原集落で分岐する県道浦原喜界空港線が北進する。北部崖下には湧水があり、この湧水は浦原と先山集落の中ほどを南流する溝川をつたって美しいリーフの浦原湾に注いでいる。



遺跡遠景

先山遺跡は、このような地形のうち、浦原集落と先山集落に挟まれた畑地に立地する。

この畑地は標高約10m～約4mの標高を測る南面する緩傾斜地である。遺跡は北側の崖下の比較的高位の地点に所在するものであるが、長い年月に亘る土砂の流入、流失のため低地にも土器片等は出土している。

これまで喜界島全域及び先山遺跡周辺の地形について概観した。

喜界島における考古学的研究は、1935年（昭10）にさかのぼる。1935年、三宅宗悦は、鴨尋常高等小学校内の新校舎前の一樹の根元付近の残土より「南島式土器」と「貝殻」を採集する一方、手久津久でも同年1月22日、新道工事中の場所より「南島式土器」、「石斧断片」、「貝殻」を採集し、それぞれ鴨貝塚、手久津久貝塚と命名し、中央の学会史に報告した。（三宅宗悦「南島の先史時代」「人類学先史学講座」第10巻、1940）

その後1956年（昭31）には、多和田真淳は、「琉球列島の貝塚分布と編年の概観」『沖縄文化財調査報告書』1956を刊行。

一方河口貞徳氏は、南島における先史時代研究の第一人者であるが、喜界島の調査については、1955年（昭30）から3カ年継続して実施された九学会連合奄美大島共同調査委員会の一員として、喜界島の考古学的調査及びその報告を行っている。（河口貞徳、国分直一、曾野寿彦、野口義麿、原口正二「奄美大島の先史時代」『奄美その自然と文化』九学会連合奄美大島共同調査委員会編1959）

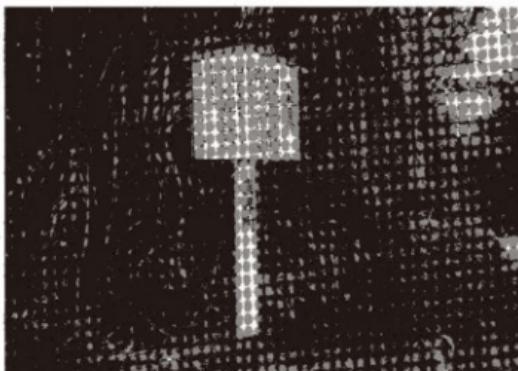
その報告によれば、1957年（昭32）、喜界島の分布調査を行い、荒木農道遺跡、荒木小学校遺跡、鴻天神貝塚、志戸桶遺跡の4遺跡を報告している。荒木農道遺跡については、「周囲に礪を配し、腕に貝輪をはめた人骨」が出土し、採集した上腕骨中に巻貝を輪切りして作った白玉類似品が数個挿入されていた。付近には槌石、土器の小片も出土していた。土器は、「宇宿上層式」に該当するものである。

荒木小学校遺跡は、「学校敷地内北東隅の採土の際に人骨が出土しており、宇宿上層式土器片」の散布や付近には、「定角式磨製石斧」の出土もみられると報告されている。

鴻天神貝塚からは、石斧、土器片、骨片、貝類等が出土している。

志戸桶遺跡については、1931年（大正6）地元の竹下車隆が採集した、須恵器5個と滑石製石鍋について報告している。

この須恵器類似の硬質陶器は、南西諸島によくみられる土器で、河口貞徳氏は「南島先史時代」『鹿児島大学南方産業科学研究所報告』第1巻2号1956で本格的に報告し、注目している。



荒木農道遺跡



鴻天神貝塚

その後、この土器については、白木原和美氏によって集大成され、報告がなされた。(白木原和美「類須恵器集成」『南日本文化』第6号1973)。氏の報告によれば、この硬陶を「類須恵器」とし、本土の須恵器と区別している。本報文中における喜界町の類須恵器は、川嶺、志戸桶七城、志戸桶を他の大島出土の類須恵器とともにあげている。

なおこの類須恵器については、1981年(昭和56)大島郡伊仙町において、窯跡が発見され、ひきつづき発掘調査が実施された。

発掘調査によると、この類のものは約11~13世紀のものと考えられるところで、群島内の類須恵器を考察するうえで貴重な資料を

提供してくれた。なお、名称については、「類須恵器」「陶質土器」等あり必ずしも一定していないが「類須恵器」が一般化している。

以上のはか、上原静氏は「奄美・喜界島荒木農道遺跡出土のイトマキボラ製利器、弥生式土器他」『南島考古』1983で、荒木農道遺跡出土遺物をもとに考察を加えている。

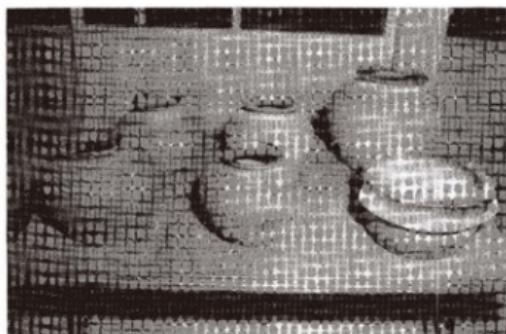
報文によると、貝製品は、ホラガイ製利器と蝶蓋貝斧であり、土器は「弥生中期末頃」と地元産の土器を指摘している。

また、1986年(昭和61)には、さきの白木原和美氏(熊本大学教授)により島の中程北西よりに所在するハンタ遺跡の発掘調査が行われ、多大の成果を挙げられた。

これら各氏の調査から喜界町には10数カ所の遺跡が知られ、時代は縄文時代にさかのぼることが知られている。

なお、1973年(昭和48)には鹿児島短期大学により喜界島総合学術調査の報告書も刊行されている。

この報告書には、浦原のヤバヤや、ムヤ5基が風葬墓として掲載されている。



類須恵器



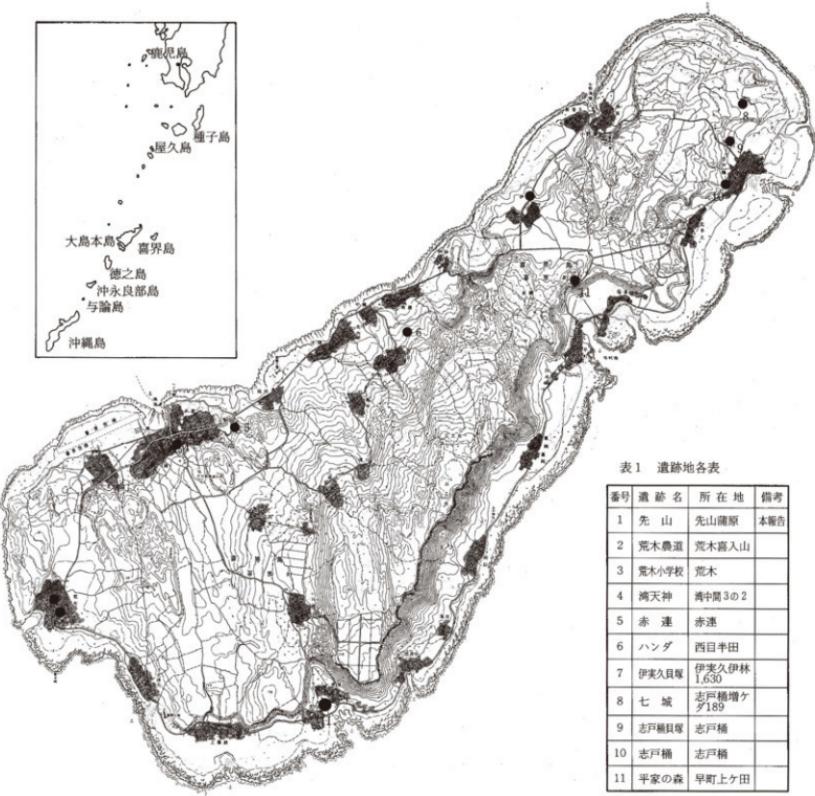


表1 遺跡地各表

番号	遺 跡 名	所 在 地	備 考
1	先 山	先山薩原	本報告
2	荒木農道	荒木喜入山	
3	荒木小学校	荒木	
4	満天神	満中間3の2	
5	赤 連	赤連	
6	ハンダ	西目半田	
7	伊東久貝原	伊東久貝林 1,630	
8	七 城	志戸橋増ヶ ダ189	
9	志戸橋貝原	志戸橋	
10	志戸橋	志戸橋	
11	平家の森	早町上ヶ田	

第2図 先山遺跡及び周辺遺跡



第3図 先山遺跡の位置及び周辺地形図

### 第Ⅲ章 発掘調査

#### 第1節 調査の概要

分布調査により発見された遺物散布地は、A～D地点に分けてあったので、発掘調査もこのエリアに従って先山遺跡A地点1トレンチという呼称を行った。(整理・報告書作成時では、煩雑となるため地点をはずし先山遺跡1トレンチから13トレンチに集合させて呼称した。)

トレンチは、事業により切土となる部分と、できるだけサトウキビ等、作物を栽培してない個所を選定して設定した。

トレンチは $2\text{m} \times 2\text{m}$ を基本とし、地点によっては $2\text{m} \times 3\text{m}$ ないし $2\text{m} \times 7\text{m}$ を設定した。

なお、8トレンチは、土器片が出土したために拡張し発掘を実施した。

トレンチ数は、13トレンチとなり発掘面積は、 $128\text{m}^2$ で、発掘調査期間は昭和61年7月14日(月)から8月9日(土)の間であった。

整理及び報告書作成は、県教育文化課収蔵庫で行い、報告書の校正等も含めて昭和62年3月31日をもってすべて完了した。

#### 第2節 層位

本遺跡は、標高約 $12\text{m} \sim 3\text{m}$ を測る略南面する低地の傾斜地であり、しかも台地基部には湧水点、先端部は海に面する地形のため、各土層は南に傾斜して堆積し、しかも、湧水や台風においては海水や砂を直接かぶるため土砂の移動がはげしく、正常な堆積を示すトレンチはなかった。

従って、土層の名称については各トレンチ毎に呼称し、あえて統一的な名称はさけた。

なお本遺跡の無遺物層は砂層であり、発掘はこの砂層まで掘下げた。各トレンチの土層断面は図示するとおりである。

台地基部の各トレンチは、現耕作土の黒色粘質土を表層にもち、基盤は砂層となる。この2層の間に、表層と砂層の混土、あるいはサンゴ塊が混在する層、水成作用によって形成されたマンガン分を含む固い層が存在する。

一方、海岸近くとなると表層下は砂層となり、砂層以外の堆積は比較的薄い。

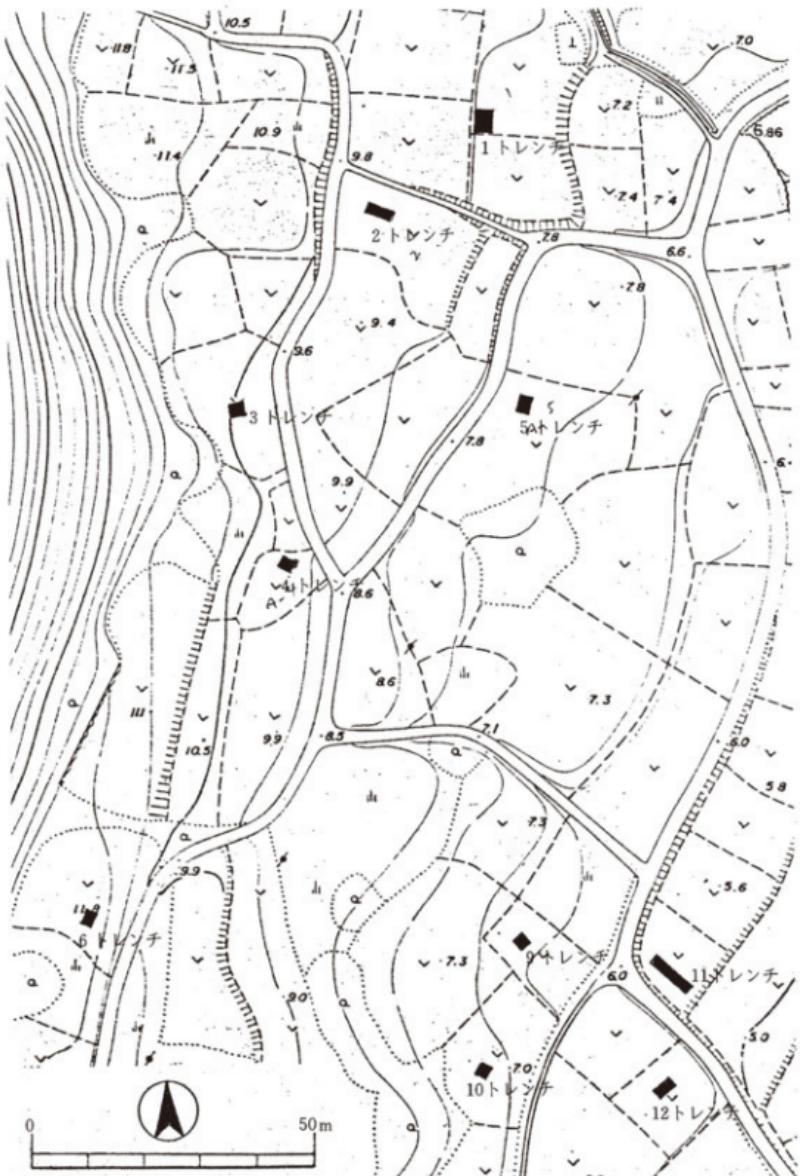
#### 第3節 遺構等

本遺跡の発掘調査では、明確な遺構は検出できなかった。

8トレンチは、本遺跡では西端に位置するところであるが、このトレンチより珊瑚塊を敷きつめた状態の出土があった。

珊瑚塊は約 $50\text{cm} \sim 10\text{cm}$ 前後のものが南北帶状に走り、その幅は約 $1.5\text{m}$ を測る。この帯を中心にして、周辺にも無数の珊瑚塊が散在していた。規則制をうかがうことはできず、従って性格や規模についても不明である。

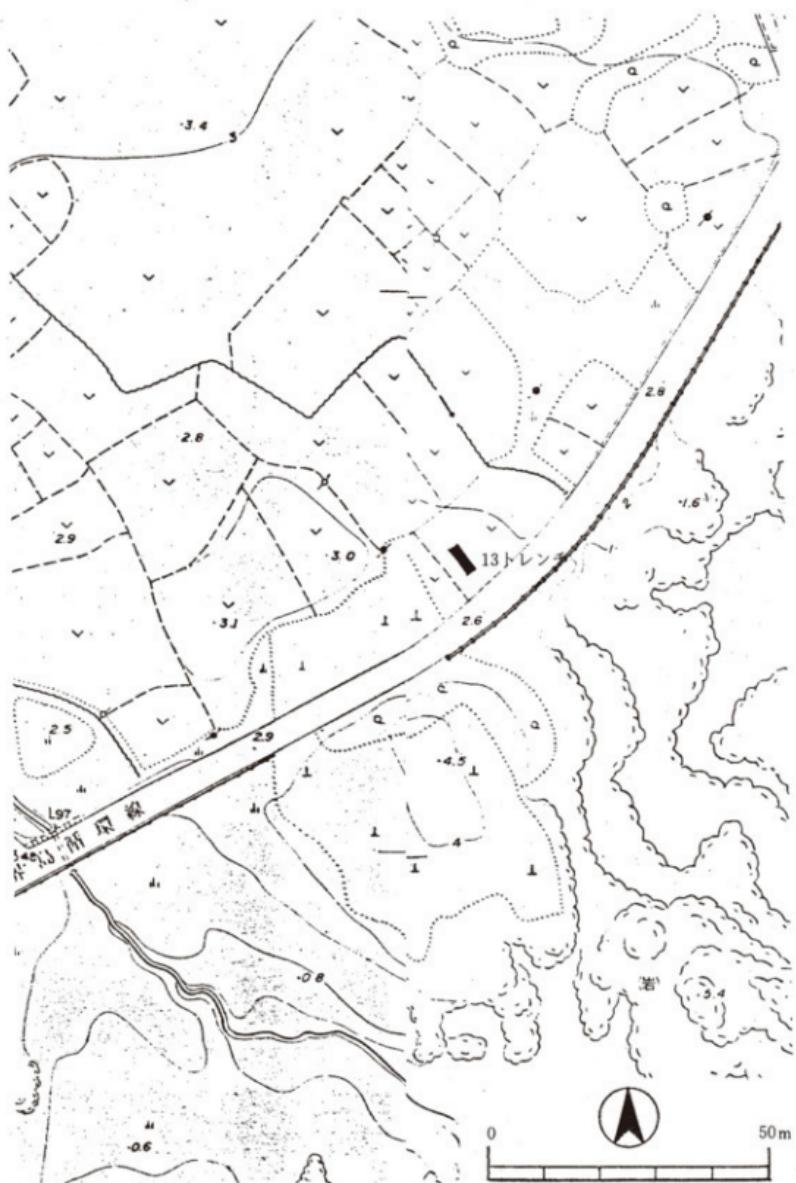
遺物は、この珊瑚塊上や周辺に、土器、獸骨、貝類が出土した。



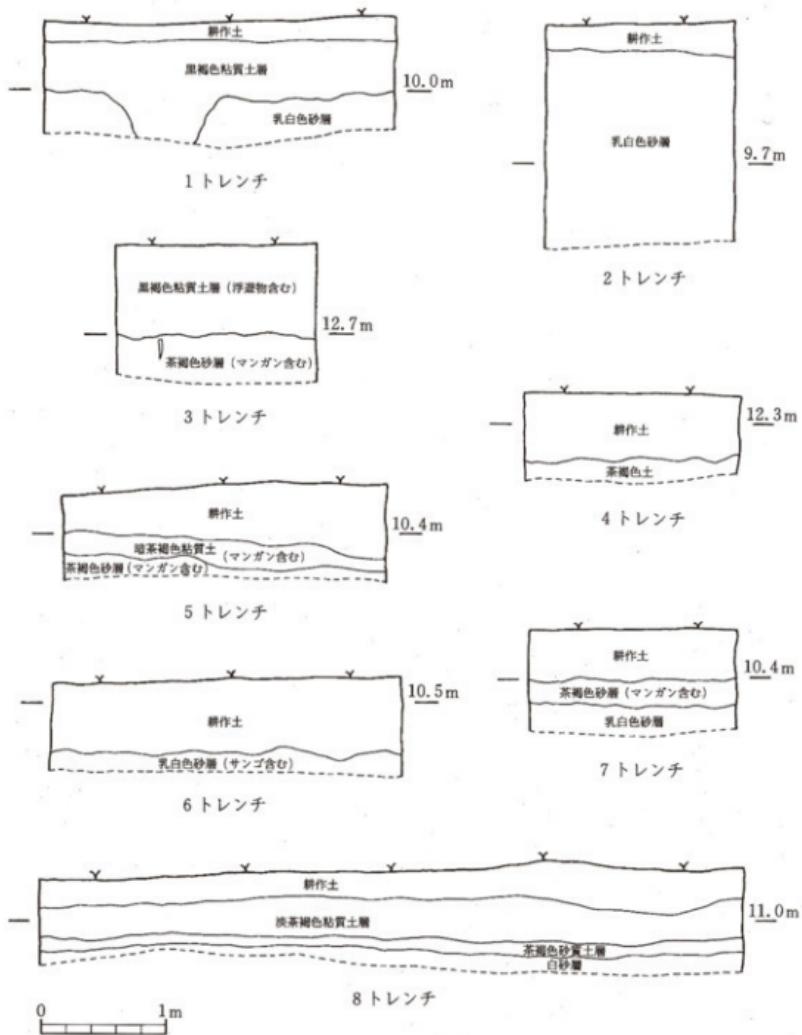
第4図 トレンチ配置図（1）



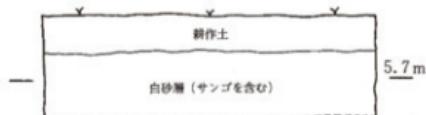
第5図 トレンチ配置図（2）



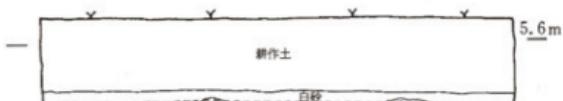
第6図 トレンチ配置図 (3)



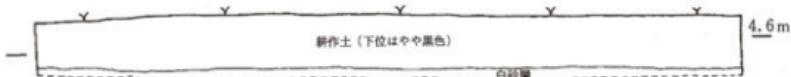
第7図 土層断面図 (1)



9 レンチ



10 レンチ



11 レンチ



12 レンチ

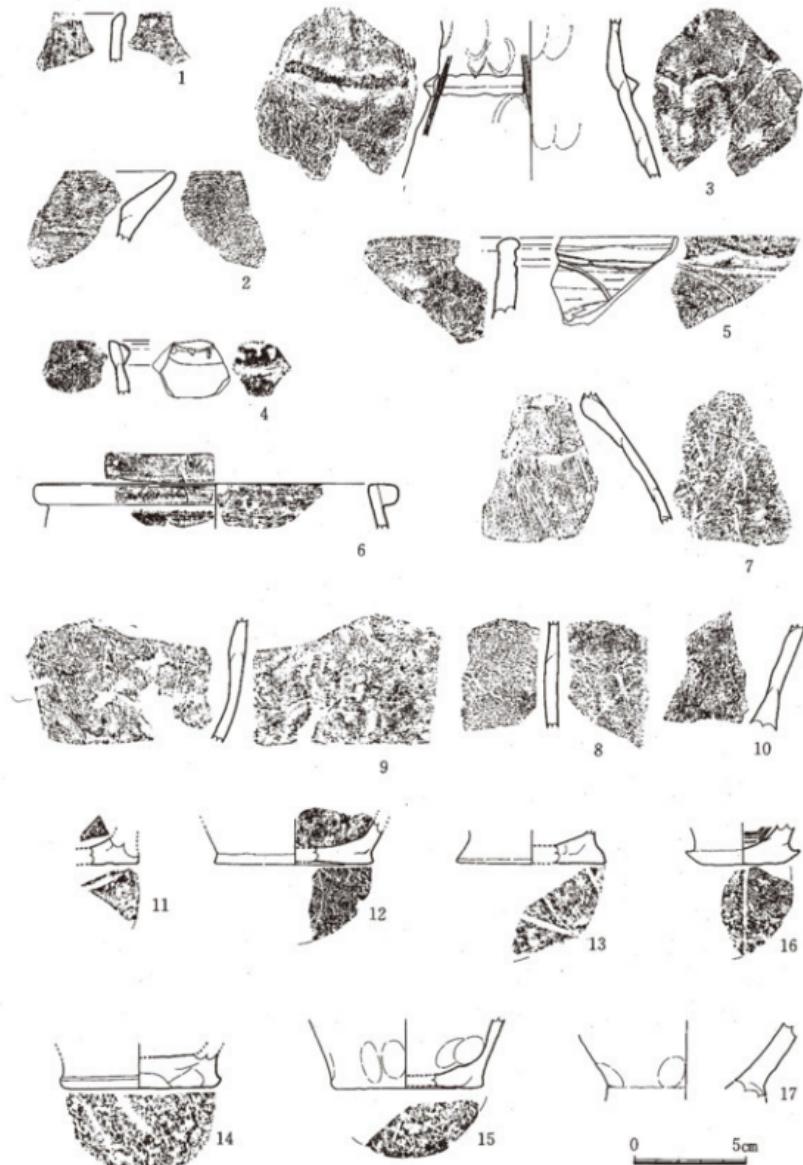


13 レンチ

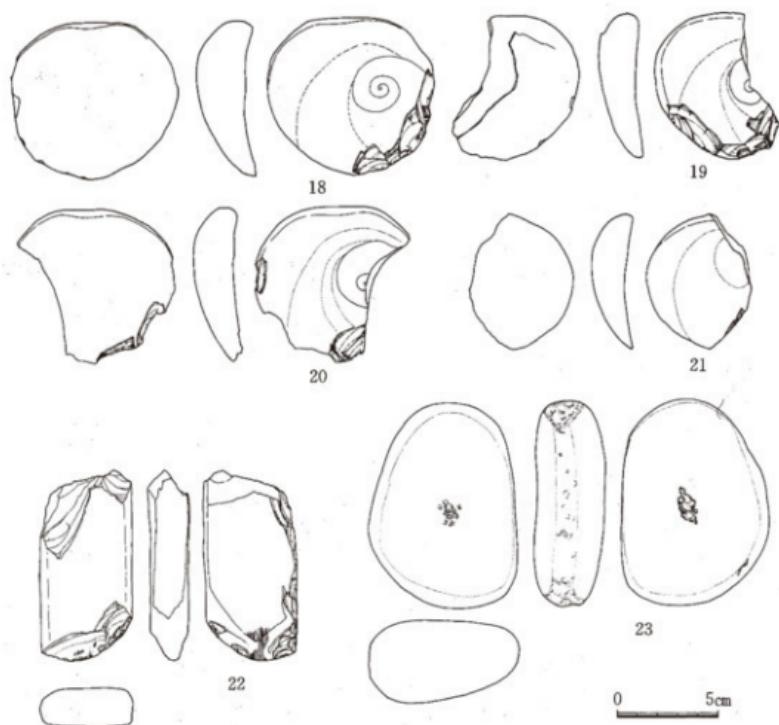
第8図 土層断面図（2）



第9図 遺物及び珊瑚塊出土状況



第10図 8 トレンチ出土遺物 (1)

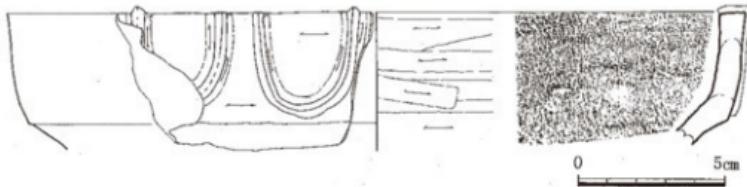


第11図 8トレンチ出土遺物 (2)

#### 第4節 遺 物

##### 1. 8トレンチ (第10, 11図, 図版7)

1. 壺形土器の口縁部片で、器壁は薄く作り出し、指頭によるていねいなナデ仕上げが行われている。器としては、小ぶりである。2. 内面の下位は条痕状による横位の掻き取り状の調整で、その他は工具による細条線を伴うナデ仕上げである。3. 頂部に刻目突帯文を持つ壺形土器で、突帯は貼りつけによる三角突帯である。傾きには若干の疑問もあるが、口縁部により外開きになると思われる。現復元値で96mm+α、内外共に指頭ナデによる調整である。内面調整は粗雑で粘土の接合部がそのまま残されている。尚、刻目は、条線を伴うヘラ状工具を用い、口縁部方向から突帯を完全に断ち切るように器面一ぱいまで深く行う。また、その間隔も間延びし、器面全体で7ヶ所程度と思われる。4. 鉢形土器、壺形土器のいずれかと思われるが不明である。ていねいなナデ調整である。5. 口唇部は丸くおさめられ、条線の認められるヘラ状工具で沈線文を描いている。6. 近世陶器で釉は施されない。7. 内面の粘土帶の接合状況より3に準じて壺形土器とした。背部付近に相当する。



第12図 9トレンチ出土遺物

11-17は全て、甕形土器の底部片で、11, 12, 13, 16の接地面には木葉が圧痕される。使用した木葉は、オオハマボウでこの種の土器に一般的に見られる。また、14, 15では、その痕跡よりサンゴ状のものを敷いたと思われる。12, 13, 16等の底部の形状は、南島でくびれ平底と呼ばれる。

18-21は、螺蓋製貝斧で、剝離痕および破碎痕よりハンマー的役を果したと思われる。

22. ホルンフェルスで、両面磨製品で、石斧的用途がみられる。

23. 砂岩でハンマーと磨面を兼ねている。

## 2. 9トレンチ (第12図、図版)

1. 甕形の形状を呈してあるが、下位ではやや広く傾く向もあり、口縁部での法量は23.4mm、焼成は堅緻、内外共に工具によるナデ調整で、口唇部は平坦面で、口縁部に口唇部間をU字状に結ぶ貼りつけ突帯をつける。

第1表 先山遺跡遺物観察表 8トレンチ(1)

図 No	器種	測定	色調⑤	色調⑥	色調⑦	胎土	法量	現存状況	備考
1	甕形	⑨ていねいな指捺ナデ	5YR 5 / 6 明赤褐色	5YR 5 / 6 灰赤	25YR 6 / 2 赤	薄緑砂粒多く含む(角セメントが多く含まれる)	-	-	惜き凝固、壁が薄く仕上げられている
		⑩ていねいなナデ	5YR 5 / 4 にふい赤褐色	7.5YR 6 / 4 にふい赤褐色	7.5YR 7 / 2 明褐色	薄緑砂粒を含む	-	-	惜き若干疑問、口縁部内側が大きく外側へ開く。外面、スズ付着
2	甕形	⑪縫合縫を伴うナデ	5YR 5 / 4 にふい赤褐色	25YR 5 / 4 にふい赤褐色	25YR 5 / 6 明赤褐色	薄緑砂粒を多く含む(石英、長石、角セメント)	96mm+e ⑫	1/5~1/6	貼りつけ突帯をヘラ状工具で縫合位に断ち切っている
		⑫縫合縫を伴うナデ	25YR 5 / 6 明赤褐色	25YR 6 / 6 明褐色	25YR 6 / 6 明褐色	薄緑砂粒を多く含む(石英粒を含む)	-	-	口縁部を真下に剥離突帯を一条粘付。縫合ないしは甕形土器のいすれかと思われるが不明
4	?	⑬ていねいなナデ	25YR 6 / 6 板	25YR 6 / 6 板	25YR 6 / 6 板	薄緑砂粒を多く含む(石英粒を含む)	-	-	口縁部を真下に剥離突帯を一条粘付。縫合ないしは甕形土器のいすれかと思われるが不明
		⑭ていねいなナデ	7.5YR 4 / 4 にふい赤褐色	10R 5 / 8 赤	10R 5 / 8 赤	細砂粒を含む	-	-	ヘラ状工具による沈線文を描く。焼成は堅緻
5	甕形	⑮工具による推進を伴うナデ	5YR 8 / 4 灰褐色	5YR 8 / 4 灰褐色	5YR 7 / 2 明褐色	5mm程の縫合を含む	134mm ⑯	-	近世陶器(釉はかけられない)
		⑯ていねいなナデ	25YR 6 / 6 板	5YR 5 / 4 にふい板	5YR 5 / 2 赤褐色	薄緑砂粒を多く含む(石英粒を少量含む)	-	-	内面には粘土の接着部が明瞭に残される
7	甕形	⑰工具による縫合位のナデ	25YR 6 / 6 板	5YR 5 / 4 にふい板	5YR 5 / 2 赤褐色	薄緑砂粒を多く含む(石英粒を少量含む)	-	-	内面には粘土の接着部が明瞭に残される

第2表 先山遺跡遺物観察表8 トレンチ(2)

図 No	器種	調整	色調①	色調②	色調③	胎土	法量	残存状況	備考
8	-	④ 横位のていねいなナデ ⑤ 横位のナデ	2.5YR 5 / 6 明赤褐色 にぶい櫻	7.5YR 5 / 3 暗赤褐色 にぶい櫻	2.5YR 4 / 3 暗赤褐色 にぶい櫻	微砂粒を多く含む (長石、石英粒を含む)	-	-	
9	-	④ 工具整形の後ナデ ⑤ ナデ	SYR 6 / 4 にぶい櫻	7.5YR 6 / 3 にぶい櫻	SYR 4 / 2 灰褐色	微砂粒を多く含む	-	-	粘土の接合部が明瞭に残される
10	壺形	④ 工具による軽のナデ ⑤ 横位のナデ	10R 5 / 8 赤	10R 4 / 6 赤	2.5YR 4 / 4 にぶい赤褐色	微砂粒を多く含む			軽最高下部片。表面はザラザラしている
11	壺形底部	④ ナデ ⑤ ナダ	2.5YR 6 / 6 暗櫻	2.5YR 7 / 6 暗櫻	2.5YR 6 / 3 にぶい櫻	微砂粒を多く含む	-	-	オオハマボウの木葉を圧痕。オオハマボウは地元ではユウナと呼ばれている
12	壺形底部	④ ナダ ⑤ ナダ	2.5YR 8 / 6 櫻	7.5YR 6 / 3 にぶい櫻	7.5YR 6 / 2 灰褐色	微砂粒を多く含む	70mm⑥	-	オオハマボウの木葉を圧痕
13	壺形底部	④ ナダ ⑤ ナダ	10R 5 / 4 赤褐色	-	10R 5 / 2 灰褐色	微砂粒を多く含む	66mm⑦	-	オオハマボウの木葉を圧痕
14	壺形底部	④ ナダ ⑤ ナダ	2.5YR 5 / 2 灰褐色	2.5YR 5 / 6 明赤褐色	2.5YR 5 / 2 灰褐色	微細砂粒を多く含む	68mm⑧	-	粘土接合が明瞭
15	壺形底部	④ 肩頭圧痕 ⑤ 肩頭圧痕	7.5YR 6 / 6 櫻	7.5YR 6 / 6 暗赤褐色	10YR 7 / 6 明黄褐色	微砂粒を含む	68mm⑨	-	
16	壺形底部	工具による駆位のナデ ④ 工具によるナデ	10R 5 / 4 赤褐色	10R 4 / 1 暗赤褐色	10R 4 / 2 赤褐色	微砂粒を含む	40mm⑩	-	オオハマボウの木葉を圧痕
17	壺形底部	④ ていねいなナデ ⑤ 工具によるナデ	2.5YR 6 / 6 櫻	5YR 6 / 4 にぶい櫻	2.5YR 5 / 2 灰褐色	微細砂粒を含む			

## 3. 12トレンチ (第13, 14図, 図版8)

1. 壺形土器の口縁部で器穂は薄く、調整は指頭ナデが行われている。胎土に石英粒を多量に含み、その為、器面に光沢がみられる。

2 - 3は口縁部が朝顔状に外反する形状で、壺形土器と思われる。3の胎土は1と同種、2は長石粒が多く、石英は少量で角セン石も含まれる。

4. 図面では直立しているが、内面の粘土接合の状況からは壺形土器の要素が高い。刻目突帯は左から右へ工具を押し引状にやや寝かしている。

5. 外面整形は入念で光沢を持つ。6. 胎土は1と同一で、刻目は間延びして施される。

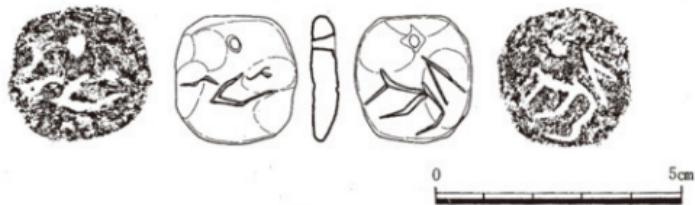
7. 胎土は1と同一で石英粒を多量に含む。くびれ平底の範疇に含まれる。

8. 接地面だけの資料で、サンゴ状の痕跡が圧痕される。

9, 10, 11, 12は押しつぶしたようなくびれ平底を呈したもので、9, 11, 12はオオハマボウの木葉を圧痕している。尚、9, 11の胎土は1に同一である。また、11の外面の指頭による



第13図 12トレンチ出土遺物（1）



第14図 12トレンチ出土遺物（2）

調整は瞭である。11は堅緻な焼成で、木葉痕も明瞭である。

### 13. 螺蓋製貝斧で、作業部の一部には磨滅の痕跡も認められる。

14. 縦25mm、横23.5mm、厚さ6.5mmの小型の土板で、粘土を押しつぶした（手づくね）土製品で、上部に穿孔している。孔は焼成前に行い、表面から棒状工具を挿入している。表裏に先端部の鋭い工具で文様を刻み込んでいる。装飾品の一種と思われる。

第3表 先山遺跡遺物観察表12トレンチ

図No	器種	調 整	色調①	色調②	色調③	胎 土	法 量	残存状況	備 考
1	裏 形	⑩ナデ ⑪ナデ にぶい粗	SYR 6 / 4	SYR 6 / 6 粗	SYR 6 / 6 粗	細砂粒を多く含む (石英粒を多く含む)	—	—	長石粒が多く含まれ、キラキラと光る
2	裏 形?	⑩画面によるナデ ⑪工具ナデ(?)	SYR 5 / 5 明赤褐	SYR 5 / 6 明赤褐	SYR 5 / 6 明赤褐	砂粒を多量に含む (長石・角セン石・石英)	—	—	器種不明、傾き疑問
3	裏 形	⑩ナデ ⑪—	7SYR 8 / 6 浅黄褐	7SYR 8 / 6 浅黄褐	7SYR 8 / 6 浅黄褐	微砂粒を多量に含む (石英粒を多く含む)	—	—	傾き若干疑問
4	裏 形?	⑩ナデ ⑪—	SYR 5 / 6 明赤褐	SYR 5 / 6 明赤褐	SYR 5 / 2 灰褐	細砂粒を多く含む (長石・少量の角セン石)			断面右側の刻目突起、刻目は左から右へやや傾かして伸び引く(真剣突の可能性が高い)
5	裏 形	⑩工具によるて いよいしなナデ ⑪ナデ にぶい粗	2.5YR 3 / 3 暗赤褐	2.5YR 5 / 4 にぶい粗	2.5YR 5 / 2 灰赤	細砂粒を多量に含む	—	—	無刻目の実際を蘇村、器面の仕上りは入念で研磨状に光沢を持つ
6	裏 形	⑩横ナデ ⑪工具によるナデ にぶい粗	2.5YR 6 / 6 にぶい粗	2.5YR 6 / 6 粗	2.5YR 6 / 6 粗	微砂粒を多量に含む (石英粒を多く含む)	—	—	部分的に刻目を施す貼りつけ突起。器面はザラザラしている
7	裏形底部?	⑩— ⑪—	7SYR 7 / 6 粗	—	7SYR 5 / 1 灰	微砂粒を多量に含む (石英粒を多く含む)	—	—	くびれのない平底
8	裏形底部	⑩— ⑪ナデ	—	2.5YR 6 / 4 にぶい粗	2.5YR 6 / 4 にぶい粗	細砂粒を多く含む (角セン石)	—	—	サンゴを圧縮したと思われる
9	裏形底部	⑩ナデ ⑪ナデ にぶい粗	SYR 6 / 4 にぶい粗	SYR 6 / 4 にぶい粗	7SYR 5 / 1 灰	微砂粒を多く含む (石英粒を多く含む)	53mm⑩	1/5~1/6	オオハマボウの木漿の圧縮
10	裏形底部	⑩ナデ ⑪ナデ にぶい粗	2.5YR 6 / 4 にぶい粗	2.5YR 6 / 4 にぶい粗	2.5YR 5 / 3 にぶい赤褐	細砂粒を多く含む	80mm⑩	—	オオハマボウの木漿を圧縮
11	裏形底部	⑩船頭によるナデ ⑪工具によるナデ にぶい粗	10YR 8 / 4 浅黄褐	10YR 8 / 4	10YR 8 / 4	微砂粒を多く含む (6mm級のサンゴ粒を含む)	77mm⑩	1/7~1/8	オオハマボウの木漿を圧縮
12	裏形底部	⑩工具による縫 位のナデ ⑪工具によるナデ にぶい粗	SYR 6 / 4 にぶい粗	SYR 7 / 2 明褐灰	SYR 7 / 1 明褐灰	砂粒を多量に含む	58mm⑩	1/2	オオハマボウの木漿を圧縮

#### 4. 11トレンチ（第14～18図、図版9）

1. 器壁は薄く直行する器形で、内外面共に指頭によるナデ調整で器面は凹凸が目立つ。胎土に多量の石英粒を含みキラキラ輝く効果を出している。口縁部法量100mm

2. 1同様器壁は薄く口縁部はやや開きながら立ち上がり、先端部は尖る。胎土に石英粒を多く含み、外面にはススの付着も見られる。復元口縁は161mm

3. 口縁部はやや外反し、4では内湾の口縁部で、口唇部は丸くおさまる。

5. 口縁部は直行し、6では外反の傾向のある口縁部で、いずれも波状口縁形を呈している。

7. 最大径が胴部上位にあり、口縁部は内傾する形状を呈している變形土器で、口縁端部は外へ開き口唇部は平坦面に仕上げている。外面にはススの付着もみられ、口縁部法量は240mmで、内面には粘土板の接合部が明瞭に残される。

8. 脇部から直行して立ち上がり、口唇部は平坦面を呈している。内外面共に工具による条痕を伴うナデ（擦過）調整が行われ、口唇部も同様である。206mmの法量

9. 多量の石英粒を含む胎土を用い、胴部に最大径があり、頭部で一旦すぼまり、さらに口縁部では外反しながら立ち上がる變形土器で、口唇部は丸くおさめる。指頭ナデのため器面の凹凸は著しく、特に内面は顕著である。また粘土板の接合部も明瞭である。

10. 11は頭部に刻目突帯文を持つ變形土器で、10の器壁は薄く石英粒を多く含んだ胎土で焼成は堅緻で調整も入念なナデで行われている。11は器壁、調整共に10とは対照的である。

12. 口縁部の開きの大きな變形土器で、1条の刻目突帯を貼りつけ、口唇部は丸くおさめる。

13. 細い刻目突帯文を持ち、口唇部は丸くおさめる。条線を伴う擦過の痕跡は明瞭である。

14. 刻目突帯文の上位は横方向、下位は縦方向の擦過、口唇部は指頭整形により丸くおさめ、刻目は、刺突で刻まれる。石英粒を多量に含む胎土で、本トレンチで最大の變形土器である。

15. 刻目突帯文の上位にヘラ搔き文が描かれ、刻目は二叉状工具により刺突風に刻まれる。石英粒、角セン石を多数含む胎土を用い、口唇部は丸くおさまる。

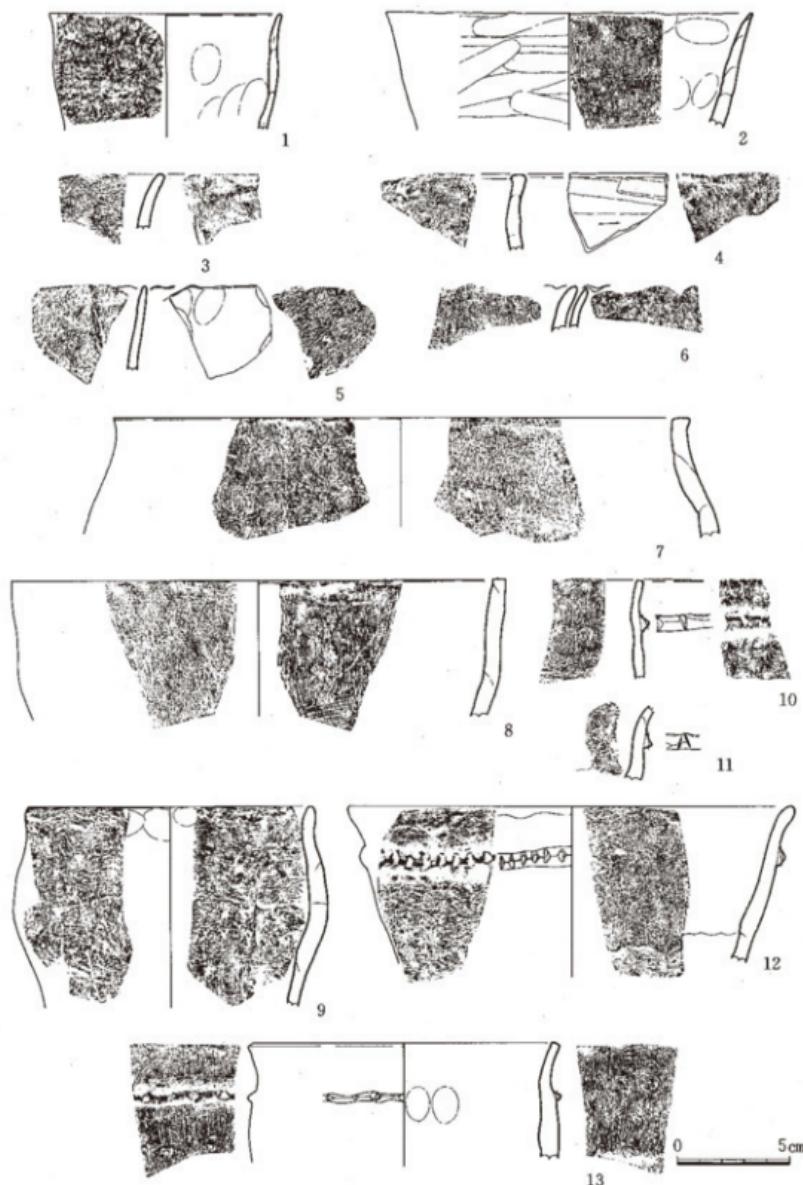
16. やや内傾する口縁部を呈し、刻目突帯文は器面を一周せず部分的に貼りつけられ。刺突状に刻目を行っている。また、突帯上位にヘラ搔き文が描かれる。

17. 円筒状に直行する器形で、口唇部は浅く刻まれる。刻目突帯文は部分的に貼りつけ、突帯を取り囲みながら、口縁部と連結する浅い沈線文が施される。胎土は砂粒を多量に含み、その結果器面はザラザラしている。調整は工具によるナデ 口径194mm

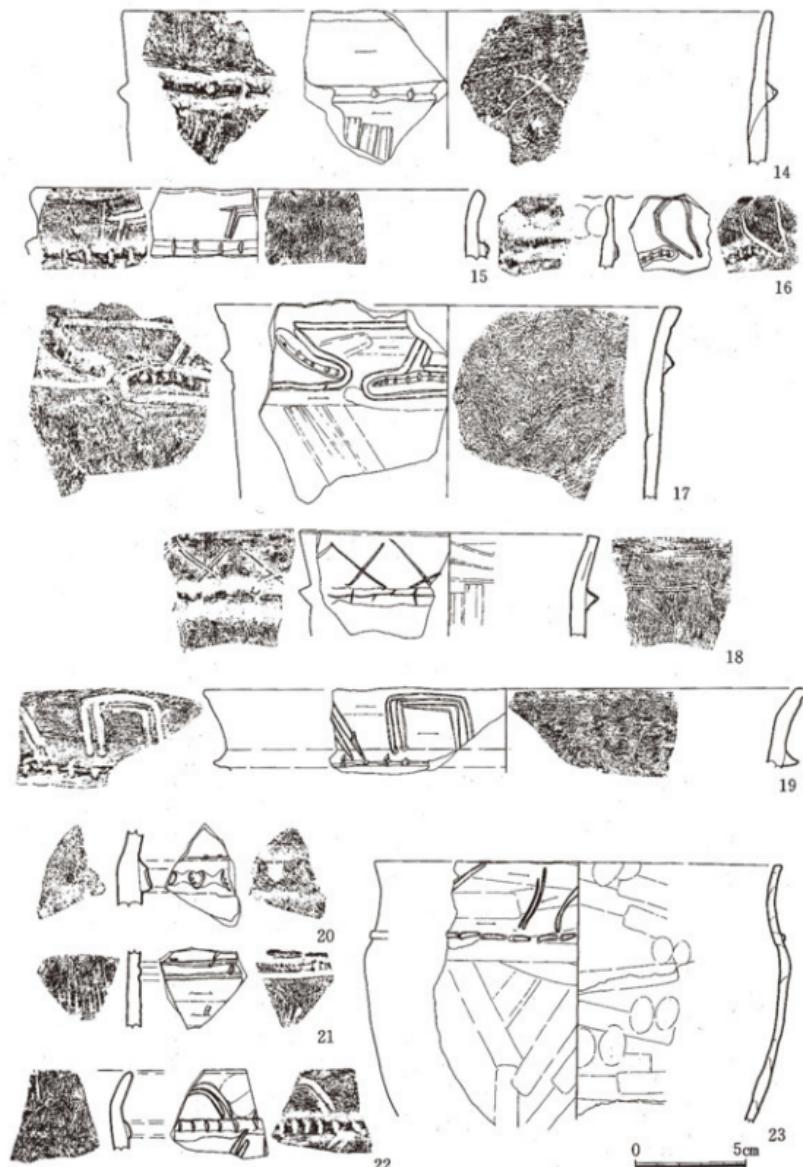
18. 器形は17に類似し、口唇部は平坦面を呈している。刻目突帯文は貼りつけ後、指頭のつまみ上げにより鋭い稜を持つ三角突帯である。突帯上位の沈線文はヘラ状工具の鋭いもので×字状文をくり返し、同一工具で刻目を施している。焼成は堅緻。

19. 砂粒を多量に含み、器面は荒くザラザラしている。刻目突帯文は稜の高い断面三角形で二叉状工具で刺突状に刻まれる。沈線文は浅く、条線の残る工具で描かれる。

20. 砂粒を多量に含む胎土で、長石粒が特に目立つ。カマボコ状の幅広の突帯に、貝殻状の工具を押圧して刻目を施している。



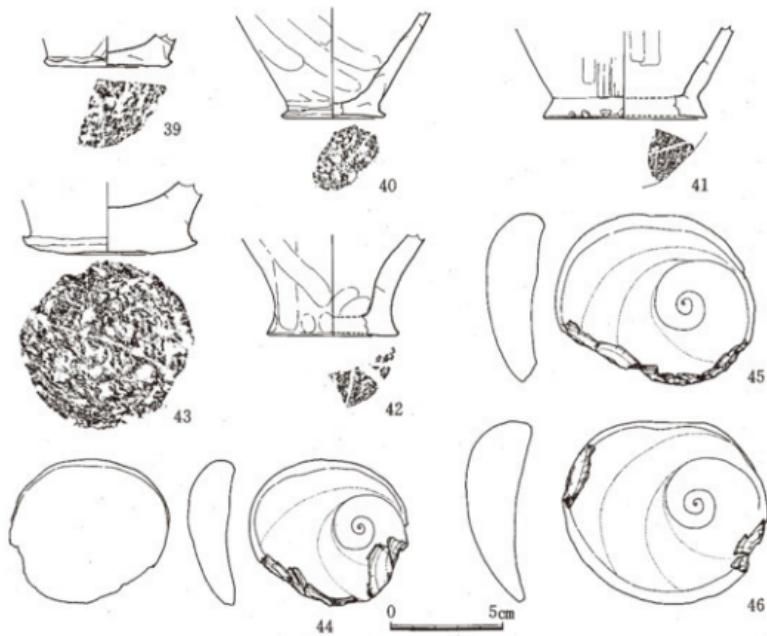
第15図 11トレンチ出土遺物（1）



第16図 11トレンチ出土遺物（2）



第17図 11トレンチ出土遺物（3）



第18図 11トレンチ出土遺物（4）

21. 平行沈線文を廻らした後、沈線上に刺突を施す。
22. 沈線文と刻目突帯文の組み合わせは20等と同一で外反の度合はやや強い形状を呈す。
23. 器壁の薄い壺形土器で、最大径は胴部にある。口唇部は平坦面で、細いカマボコ状の刻目突帯文が貼りつけられる。沈線文は浅く、口唇端部と突帯とを結んでいる。焼成は堅緻。
24. 20の沈線文はいずれも浅く描かれる。石英粒を多く含む。
25. 壺形土器の胴最下部と思われる。入念なナデ仕上げで光沢のある器面である。
30. 内外に1点ずつ「モミ痕」状の圧痕が認められるが詳細は不明。
31. 外面はナデ、内面状痕調整の細沈線文を持つ破片で、面縄前庭式土器片である。1点だけの出土である。
- 32-42はオオハマボウの木葉を圧痕し、43は木葉を圧痕した後、サンゴ状のものを再度圧痕している。全てが、基本的にくびれ平底に属する。
- 45-46は螺蓋製貝斧

第4表 先山遺跡遺物観察表11トレンチ(1)

図 No	器種	調 整	色調⑤	色調⑥	色調⑦	胎 土	法 量	残存状況	備 考
1	塵 形	⑨頭部整形の後工具による基条線を伴うナデ ⑩指頭ナデ	SYR 7 / 3	10YR 7 / 3	5YR 6 / 1	微砂粒を多く含む(石英粒・角セン石)	100mm②	1 / 8 ~ 1 / 9	直行する器形に口縁部でやや外反、端部の外反による
2	塵 形	⑨指頭による横ナデ ⑩指頭ナデ	7.5YR 7 / 4	7.5YR 7 / 4	7.5YR 6 / 2	微砂粒を多く含む(石英粒多し)	161mm②	1 / 4 ~ 1 / 5	口縁部は尖りの傾向、器頭調整はしていない。石英粒がよく含まれたカリオキラと見る
3	塵 形	⑨工具による基条線を伴うナデ ⑩工具による基条線を伴うナデ	7.5YR 7 / 6	7.5YR 3 / 2	7.5YR 3 / 2	微砂粒を多く含む(石英粒・角セン石粒多し)	—	—	口縁部で外反傾き若干疑問
4	塵 形	⑨工具による横ナデ ⑩指頭ナデ	10YR 7 / 3	5YR 6 / 6	5YR 6 / 6	微砂粒を多く含む(石英粒多し)	—	—	口縁部は丸味を持つ平坦面を形成。傾き若干疑問
5	塵 形	⑨指頭ナデ ⑩指頭ナデ	2.5Y 8 / 3	2.5Y 4 / 1	2.5Y 4 / 1	微砂粒を多く含む(石英粒多し)	—	—	部分的に波状口縁を形成。指頭整形のために器頭は白石を呈している
6	塵 形	⑨指頭ナデ ⑩指頭ナデ	7.5YR 6 / 6	7.5YR 7 / 6	7.5YR 6 / 6	微砂粒を多く含む(石英粒・角セン石)	—	—	波状口縁を形成(波状調整かまみ上によく器頭の機能性もある)
7	塵 形	⑨指頭による横ナデ ⑩指頭による横ナデ	5YR 6 / 6	25YR 5 / 8	25YR 6 / 8	砂粒を多く含む(石英)	240mm②	1 / 13 ~ 1 / 14	頭部上位により粗い土を持つ。頭部より内側する所まで延焼度の一程と異なっている
8	塵 形	⑨工具による基条線を伴うナデ ⑩工具による基条線を伴うナデ	10R 7 / 4	25YR 5 / 6	25YR 6 / 3	微砂粒を多く含む(石英粒・角セン石)	205mm②	1 / 9 ~ 1 / 10	口縁部も工具整地が行なわれ、平坦面を呈している焼成は極めて堅い
9	塵 形	⑨指頭ナデ ⑩指頭ナデ	2.5YR 6 / 6	SYR 6 / 6	5YR 6 / 6	微砂粒を多く含む(石英粒・角セン石せん多し)	122mm②	1 / 8 ~ 1 / 9	最大径は肩部(100mm)、指頭整形のため器頭は凸凹を呈している
10	塵 形	⑨指頭による横ナデ ⑩工具ナダの後指頭による横ナデ	7.5YR 7 / 6	7.5YR 6 / 4	7.5YR 5 / 1	微砂粒を多く含む(石英粒・角セン石)	—	—	外反部に「あの刻」突起(断面三角・V字のから刻目)・口縁部は外傾の平坦面
11	塵 形	⑨— ⑩ナデ	2.5YR 5 / 6	2.5YR 5 / 6	2.5YR 5 / 6	微砂粒を多く含む	—	—	外反部に「あの刻」突起(断面三角・V字のへき刻目)
12	塵 形	⑨指頭ナデ ⑩指頭ナデ	SYR 7 / 6	SYR 6 / 1	SYR 6 / 3	微砂粒を含む(石英粒・角セン石)	192mm②	1 / 9 ~ 1 / 10	外反部に「あの刻」突起(断面三角・V字のへき刻目)・大きさ若干疑問
13	塵 形	⑨上位に繊維、下部に工具による横ナデ、下部に工具による横ナデ、下部は工具による横ナデ	7.5YR 7 / 3	SYR 6 / 6	SYR 6 / 4	微砂粒を多く含む(石英粒多し)	130mm②	1 / 9 ~ 1 / 10	外反部に「あの刻」突起(刻突による〇字刻目)・口縁部は外傾の平坦面
14	塵 形	⑨上位は工具による横ナデ、下部は工具による横ナデ、下部は工具による横ナデ	2.5YR 6 / 6	SYR 7 / 4	2.5YR 6 / 4	微砂粒を多く含む(石英粒・角セン石)	266mm②	1 / 10 ~ 1 / 11	1条の刻目突起(断面三角形・半載軸状工具による刻突)
15	塵 形	⑨指頭による横ナデ ⑩指頭ナデ	10R 5 / 6	5YR 6 / 6	25YR 5 / 4	微砂粒を多く含む(石英粒・角セン石)	196mm②	1 / 12 ~ 1 / 13	刻突突起(断面三角形・二叉状工具による刻突)・二叉状工具による刻突
16	塵 形	⑨ナデ ⑩ナデ	SYR 3 / 6	SYR 6 / 3	SYR 5 / 2	微砂粒を多く含む	—	—	断面台形の部分的な尖突で刺突(あるいは孔)・工具は波状文と斜・二叉状・張き足型
17	塵 形	⑨工具によるナデ ⑩工具によるナデ	2.5YR 6 / 2	2.5YR 5 / 1	2.5YR 4 / 1	砂粒を多量に含む(石英粒多し)	194mm②	1 / 8 ~ 1 / 9	刺突(波状)は部分的につけられた状態を取り回すようにならざれど、波状文はつなげられる。波状はアラサ
18	塵 形	⑨横ナデ ⑩工具による基条線を伴うナデ	2.5YR 5 / 6	SYR 5 / 8	5YR 5 / 8	砂粒を含む(長石角セメント)	124mm②	1 / 7 ~ 1 / 8	外反部に断面三角形の刺突(波状)・工具は波状文と斜・二叉状・張き足型
19	塵 形	⑨工具によるナデ ⑩工具によるナデ	10R 5 / 4	SYR 6 / 4	SYR 6 / 4	砂粒を多量に含む(長石…)	260mm②	1 / 7 ~ 1 / 8	断面三角形の刺突(波状)・工具は波状文と斜・二叉状・張き足型
20	塵 形	⑨ナデ ⑩ナデ	2.5YR 7 / 3	2.5YR 7 / 4	2.5YR 7 / 4	砂粒を多量に含む(長石…)	—	—	幅広い尖削に刺突による刻目、波状文は不明體面はザラザラ
21	塵 形	⑨ナデ ⑩ナデ	SYR 5 / 3	SYR 7 / 3	SYR 7 / 3	細砂粒を多く含む(長石石)	—	—	二条の平行比輪文、沈穂文に交差するように刺突が施される
22	塵 形	⑨ナデ ⑩指頭ナデ	7.5YR 7 / 4	7.5YR 7 / 2	7.5YR 7 / 2	細砂粒を多く含む	—	—	外反部・断面台形の刺突(波状)・工具による刻突(波状)・上下に波状文

第5表 先山遺跡遺物観察表11トレンチ(2)

No	器種	調査	色調⑧	色調⑨	色調⑩	地土	法量	現存状況	備考
23	甕 形	⑨工具によるナデ ⑩指頭ナデ	10R 6/6 赤 磁	10R 5/6 赤	10R 5/6 赤	砂粒を多量に含む(長石…)	175mm⑪	1/7~1/8	断面合形の剖面変形、同一工具による浅い波線文(工具は外縁の半周面を呈す)
24	甕 形	⑨工具によるナデ ⑩ナデ	SYR 6/6 橙	25YR 6/6 橙	25YR 6/3 にかい橙	砂粒を多く含む(石英粒・角セン石…)	—	—	浅い波線文が施される側面はザザラ
25	甕 形	⑨ナデ ⑩ナデ	SYR 6/6 橙	SYR 6/6 橙	SYR 6/6 橙	砂粒を多く含む(石英粒・角セン石…)	—	—	不規則な浅い波線文
26	甕 形?	⑨指頭ナデ ⑩指頭ナデ	25YR 5/6 明赤 橙	25YR 6/4 にかい橙	25YR 6/4 にかい橙	砂粒を多く含む(石英粒・角セン石…)	—	—	側面整形のため器面の凸凹が激しい
27	甕 形?	⑨工具によるナデ ⑩工具による柔軟状の割いナデ	7.5YR 5/3 にかい橙	10R 5/6 赤	7.5YR 5/1 灰	砂粒を多量に含む(石英粒・角セン石…)	—	—	表面はザザラしている整形は深い、傾き異常
28	?	⑨一 ⑩工具による柔軟状のナデ	SYR 5/8 明赤 橙	SYR 6/6 橙	SYR 6/2 灰	砂粒を多量に含む(石英粒・角セン石…)	—	—	器底不明、傾き異常
29	甕 形?	⑨指頭ナデ ⑩指頭ナデ	SYR 6/6 橙	SYR 6/6 橙	SYR 6/6 橙	砂粒を含む(長石)	—	—	口部に胡鼻
30	甕 形?	⑨工具によるナデ ⑩指頭ナデ	SYR 7/4 にかい橙	SYR 6/6 橙	25YR 4/1 赤	砂粒を少量含む	140mm⑫	1/3	器壁不明、内外に1点づつ「モミ痕」の圧痕
31	鉢 形	⑨ナデ ⑩柔軟	7.5YR 7/6 橙	25YR 8/2 灰	25YR 8/2 白	砂粒を多量に含む(石英)	—	—	裏文(圓筒前底式)片枕によるT字状文
32	甕 形	⑨工具によるナデ ⑩ナデ	2.5YR 4/4 にかい橙	2.5YR 4/1 灰	2.5YR 4/2 赤	砂粒を含む(石英粒・角セン石…)	45mm⑬	1/2	オオハマボウの木葉を明瞭に圧痕
33	甕 形	⑨ナデ ⑩ナデ	SYR 6/4 にかい橙	SYR 5/6 明赤 橙	SYR 5/6 赤	砂粒を多く含む	67mm⑭	1/4	オオハマボウの木葉を明瞭に圧痕
34	?	⑨指頭ナデ ⑩工具によるナデ 後指頭ナデ	7.5YR 7/6 橙	SYR 6/6 にかい橙	SYR 7/3 にかい橙	砂粒を多く含む(石英粒・角セン石…)	63mm⑮	1/3	やや上げ瓶、木葉圧痕の後、ナデられた可能性あり
35	甕 形	⑨指頭による横ナデ ⑩指頭によるナデ	10R 4/8 赤	5YR 5/1 赤	2.5YR 5/4 灰	砂粒を多量に含む(長石…)	88mm⑯	1/8~1/9	オオハマボウの木葉を明瞭に圧痕
36	甕 形	⑨工具による種ナデ ⑩一	10R 5/4 赤 橙	10R 5/4 赤 橙	10R 5/4 赤 橙	砂粒を多量に含む(角セン石…)	62mm⑰	3/4	オオハマボウの木葉を圧痕、重量あるの安定した平底
37	甕 形	⑨指頭によるナデ ⑩工具指頭ナデ	2.5YR 5/4 にかい橙	2.5YR 6/3 にかい橙	2.5YR 5/2 赤	砂粒を多く含む(石英粒・角セン石…)	69mm⑱	1/4~1/5	オオハマボウの木葉を圧痕
38	甕 形	⑨指頭によるナデ ⑩ナデ	SYR 6/4 にかい橙	SYR 6/4 にかい橙	SYR 6/4 にかい橙	砂粒を多く含む	52mm⑲	1/4~1/5	オオハマボウの木葉を明瞭に圧痕
39	甕 形	⑨ナデ ⑩ナデ	2.5YR 5/4 にかい橙	2.5YR 5/4 赤	2.5YR 5/1 赤	砂粒を多量に含む	53mm⑳	1/4	オオハマボウの木葉を明瞭に圧痕
40	甕 形	⑨ナデ ⑩ナデ	2.5YR 5/4 にかい橙	2.5YR 3/1 赤	2.5YR 4/2 赤	砂粒を多く含む(石英粒・角セン石…)	46mm㉑	1/4	オオハマボウの木葉を明瞭に圧痕
41	甕 形	⑨工具による繊ナデ ⑩工具による繊ナデ	SYR 7/4 にかい橙	SYR 4/2 赤	SYR 4/2 赤	砂粒を多く含む(石英粒・角セン石…)	71mm㉒	1/8~1/9	オオハマボウの木葉を明瞭に圧痕
42	甕 形	⑨指頭ナデ ⑩指頭ナデ	2.5YR 6/6 橙	2.5YR 7/4 にかい橙	2.5YR 6/4 赤	砂粒を多量に含む(石英粒・角セン石…)	58mm㉓	1/6~1/7	オオハマボウの木葉を含む
43	甕 形	⑨ナデ ⑩一	2.5YR 6/6 橙	2.5YR 6/6 橙	2.5YR 6/6 橙	砂粒を多く含む(石英)	75mm㉔	1/1	オオハマボウの木葉を圧痕した後、サンゴ状のものを角度圧痕

## 先山遺跡出土の自然遺物

### —とくに出土動物骨について—

鹿児島大学 西中川 駿

奄美地方には数多くの遺跡があり<sup>2)</sup>、自然遺物、とくに動物骨の出土も少なからず報告されている。<sup>1,2-6)</sup>今回調査した先山遺跡は、鹿児島県大島郡喜界町先山にあり、喜界中部地区畠地帯総合土地改良事業にさきがげ、昭和61年7月～8月に、喜界町教育委員会が、鹿児島県文化課戸崎、長野両氏の指導のもとに発掘し、7～12世紀の人工遺物（兼久式土器など）の出土した遺跡である。ここでは人工遺物と共に伴った自然遺物、とくに動物骨について、その概要を報告する。

先山遺跡から出土した自然遺物は、総重量247.1g（貝類を除く）で、そのうち哺乳類のものが209.2gで全体の85%を占め、次いで爬虫類の30g、魚類の7.9gである。出土した哺乳類の骨片は、イノシシ（48.0g）、ウシ（110.1g）、ウマ（51.1g）のものである。

イノシシは、11トレンチ、8トレンチから前頭骨（左）、上顎骨（右）、橈骨（左）、尺骨（右）の4個の出土で、いずれも不完全な骨片であり、骨端のとれた若い個体である。骨の形状は、現生のリュウキュウイノシシとよく似ており、小型である。

ウシは、12トレンチ、11トレンチより側頭骨（右）、第1、2前臼歯（左上顎、乳歯）、大腿骨（？）、中足骨（左）、第3趾中節骨（右）など8個がみられ、（図版Iの5-10参照）、距骨の最大保存長は、64.3mmで、これは現代黒毛和牛のものより小さい。

ウマは、11トレンチ、8トレンチから上顎の第2後臼歯（左）、下顎の第2前臼歯（左）、舌骨（右）、蹠骨（右）など4個がみられ（図版Iの11-14参照）、第2前臼歯の歯冠長×幅は、26.3×16.6mmで、これは現生のトカラウマのものとほぼ同じ大きさである。

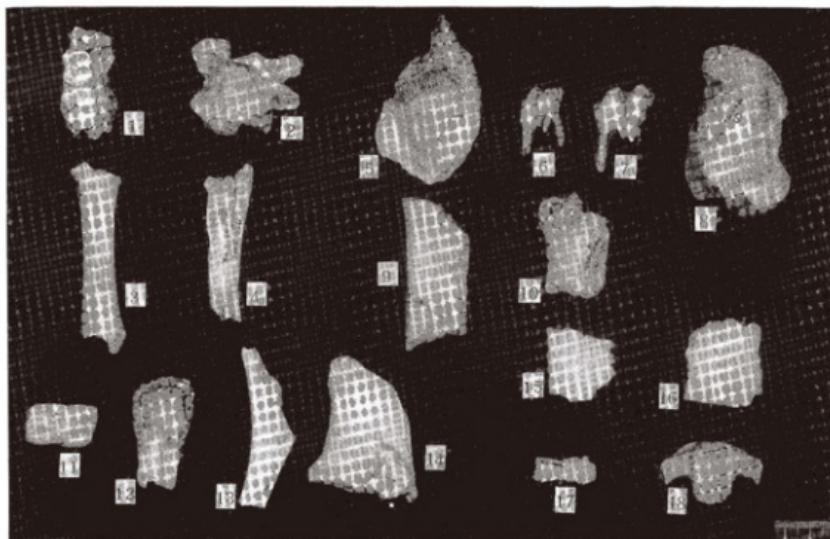
爬虫類は、11トレンチからウミガメの頭蓋骨片（8個）が出土している（図Iの15、16参照）。

魚類は、11トレンチからブダイの上顎骨や下咽頭骨（図版Iの17、18参照）、それに大型魚類の椎骨片がみられる。

以上、先山遺跡の出土骨について述べたが、これまでの調査で奄美諸島の遺跡から、イノシシ、イヌ、アマミノクロウサギ、ネズミ、ジュゴン、クジラなどの出土が報告されている。喜界町では、先人により伊実久貝塚（縄文）から、動物種は不明であるが、獸骨の出土のあったことが報告されている。<sup>2)</sup>今回出土したイノシシの骨は、若い個体ではあるが、現生のリュウキュウイノシシによく似た形態をもち、小型である。今回の出土は、少数例であるが、当時喜界島にイノシシが生息していた可能性が考えられ、また、当時の人々がイノシシを狩猟し、食料としていたことがうかがわれる。ウシやウマの骨の出土もみられるが、地層的に確実に7～12世紀のものであるとすれば、日本在来馬であるトカラウマの起源を探る上に非常に貴重なもので、また、ウシの骨も現代黒毛和牛よりも小さく、改良以前のウシのものであることは確かであり、日本古代牛の系統を探る上にも貴重な資料となると考えられる。

### 参考文献

1. 伊仙町教育委員会：犬田貝塚，P74-81，1984
2. 鹿児島県教育委員会：鹿児島市町村別遺跡地名表，1977
3. 笠利町教育委員会：サウチ遺跡，P65-66，1978
4. ◊ ◊ ◊ : 宇宿貝塚，P95-96，1978
5. ◊ ◊ ◊ : あやまる第2貝塚，P62-65，1984
6. 西中川 勲：薩南及び南西諸島の縄文、弥生遺跡出土の自然遺物  
—とくに出土哺乳動物骨について—鹿大考古2, 102-112, 1984



図版の説明

1-4: イノシシ 5-10: ウシ 11-14: ウマ 15, 16: ウミガメ 17, 18: ブダイ

1. 上顎骨 (右)
2. 第3腰椎
3. 橫骨 (左)
4. 尺骨 (右)
5. 倭頭骨 (右)
6. 第1前臼歯 (左上顎)
7. 第2前臼歯 (左上顎)
8. 距骨 (右)
9. 中足骨 (左)
10. 第2趾中節骨
11. 第2前臼歯 (左下顎)
12. 第2後臼歯 (左下顎)
13. 舌骨 (右)
14. 踵骨 (右)
- 15, 16. 頭蓋骨片
17. 上顎骨 (右)
18. 下咽頭骨

## 第 IV 章 まとめ

### 8 トレンチ

6の近世陶器の1点を除く他の遺物は、ほぼ同時期の所産で、兼久式土器と呼ばれるものである。器種は、壺形土器と壺形土器の二種が認められる。

壺形土器は、刻目突帯を貼りつけ、壺形土器は、1の無文で小型のものと5の沈線文を施すもの、2のように外反する口縁部を持つものが見られる。特に、2の壺形土器は内面が条痕による横位の搔き取りによる調整が行われており、形状や調整等の特徴より内面ヘラケズリの壺形土器の模倣の感がある。<sup>(註1)</sup>

底部の形状は、くびれ平底で、接地面には木葉圧痕が認められる。圧痕される木葉は、オオハマボウ（通称ユウナ）で、兼久式土器に一般的に用いられている。

### 9, 12 トレンチ

8 トレンチと同様で、兼久式土器である。

壺形土器は、刻目突帯文と小型で胸部が膨み口縁部が外反するものとが見られる。底部は、木葉圧痕を持つくびれ平底である。

### 11 トレンチ

壺形土器は、無文（1～9）、刻目突帯文を貼りつける（10～14・20）、貼りつけ刻目突帯文と沈線文を施すもの（15～19・22）、沈線文と刺突文をつけた（21）ものが見られ、多彩な内容を示している。

無文の壺形土器は、1・2・3のように小型で平縁口縁を持つもの、5・6のように波状の口縁形を持つもの、4・7・8のように平坦面の口唇部を持ち内傾・外傾するもの等が認められる。また、有文の壺形土器は、特に、刻目突帯文の位置より外反の傾向を示すのが一般的である。

近年の発掘調査の増加により、兼久式土器の生活様式や編年的位置づけも行われるようになって来ている。面繩第1貝塚のA-0区では、兼久式土器の主体層（貝層）より下位から開元通宝が出土していることより、ある程度の時間を想定することができる。また、あやまる第2貝塚では、古墳時代の笠貫式土器併行期と思われる土器を包含する層よりも上層から兼久式土器が出土することより、その初源は古墳時代後期であることを指摘している。面繩第1貝塚A-0区出土の兼久式土器は、刻目突帯文+沈線文の有文と、無文の壺形土器が見られる。有文の壺形土器の器形は本遺跡と同様、口縁部が外反するのが一般的である。また、底部の形状もくびれ平底である。あやまる第2貝塚出土の中には、口縁部が内傾する無文の壺形土器が出土しており、本遺跡11号トレンチの7とよく類似している。長浜金久第1遺跡からは、黒色土器、布目圧痕土器、内面ヘラケズリ壺形土器が出土し、6世紀から10世紀の所産として細分し編年が示されている。<sup>(註2)</sup>しかし、112点の壺形土器の内、13層1点、21層1点、他は全て19層の出土とされる。また、出土している47点の壺形土器、19点の土師器の全てが19層からの出土であ

る等から、やや慎重さにかけるきらいはある。また、中山清美氏により型態的細分化が試みられているが、編年の位置づけを示すまではいたっていないようである。したがって、現時点では、南九州編年では、古墳時代後期から平安時代の間に位置づけられ、沖縄編年ではアカヤンガーワ式土器からフェンサ下層式土器の間に位置づけられている。<sup>(註5)</sup> 今後、遺跡間の比較・検討により明瞭な細分化が可能になると言える。ちなみに、各遺跡で、求められているカーボンC<sup>14</sup>の測定値も、この間の数値が与えられており、貴重な資料である。

本遺跡も、上記した時期のいずれかの間に位置づけらると思われるが、遺跡の保存状況も不良なため詳細は明らかでない。

<註>

- 1 弥栄久志編 「長浜金久遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(32)』鹿児島県教育委員会 1985
- 2 牛ノ浜 修・堂込 秀人 「面繩第1・第2貝塚」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会 1983
- 3 池畠 耕一・牛ノ浜 修他 「あやまる第2貝塚」『笠利町文化財報告No7』鹿児島県大島郡笠利町教育委員会 1984
- 4 <註1>と同じ
- 5 中山 清美 「兼久式土器〔I〕」「南島考古No8」沖縄考古学会 1983  
中山 清美 「兼久式土器〔II〕」「南島考古No9」沖縄考古学会 1984
- 6 高宮 廣衛 「暫定編年(沖縄諸島)の第3次修正」『沖縄国際大学文学部紀要』第12巻第1号 沖縄国際大学文学部 1984  
金武 正紀・当真 翌一 「沖縄における地域性」『岩波講座日本考古学5—文化と地域性—』岩波書店 1986

## あとがき

炎天下の1ヶ月であった。寒暖計の水銀はトレンチでの直射日光ではあったが、飛んでしまった。吹く風は、さとうきびにさえぎられる。ツマベニチョウも朝夕のしのぎやすい刻を選んでハイビスカスの蜜を求めていた。

このような暑さの中で、地元の作業員の方は最後まで熱心に発掘に従事された。喜界町における本格的な発掘は今回がはじめてであったので、関心も高かった。

出土遺物等にはあまりめぐまれなかったが、トレンチを設定した地主さんの快い承諾もふくめ大過なく調査を終了することができた。

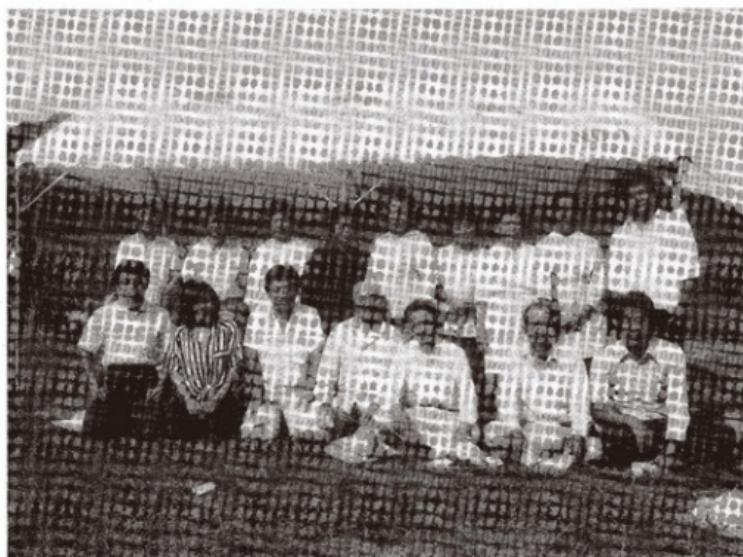
多くの方々のご協力で調査は終わった。記して感謝申し上げて、あとがきとします。

### <発掘作業>

嘉 次男、川崎栄一郎、福山 照、平田 静、嘉 良二、新山 陽、前田 覧、嘉ミサ子、吉住春子、林 操、田向キミ、兼田フジ、竹村敏子、屋アキ子、屋タエ子、生ヨシエ

### <整理作業>

田丸久美子、山下治子、浜田幸江





遺跡遠景



遺跡遠景



発掘風景



発掘風景



遺跡近景



土層斷面



土層断面



遺物及び珊瑚塊出土状況



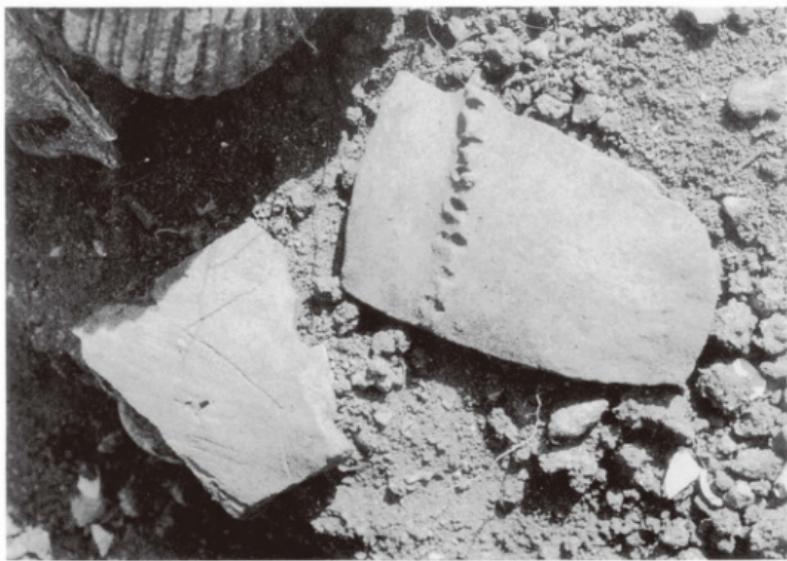
遺物出土状況



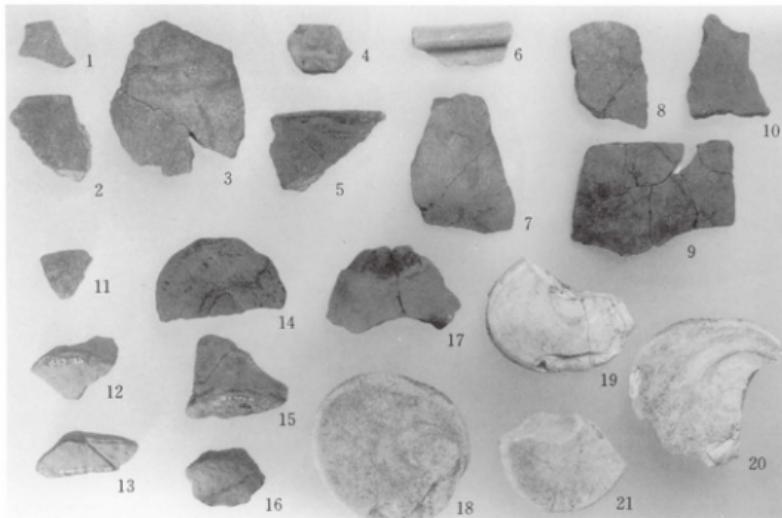
遺物出土状況



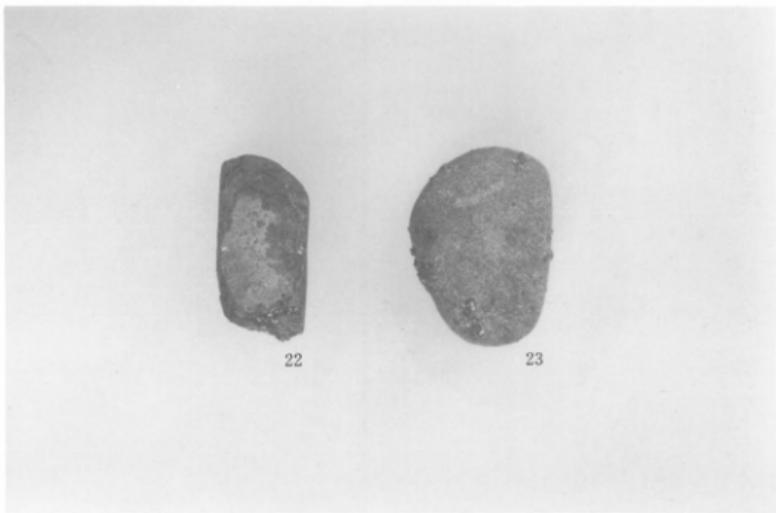
遺物出土狀況



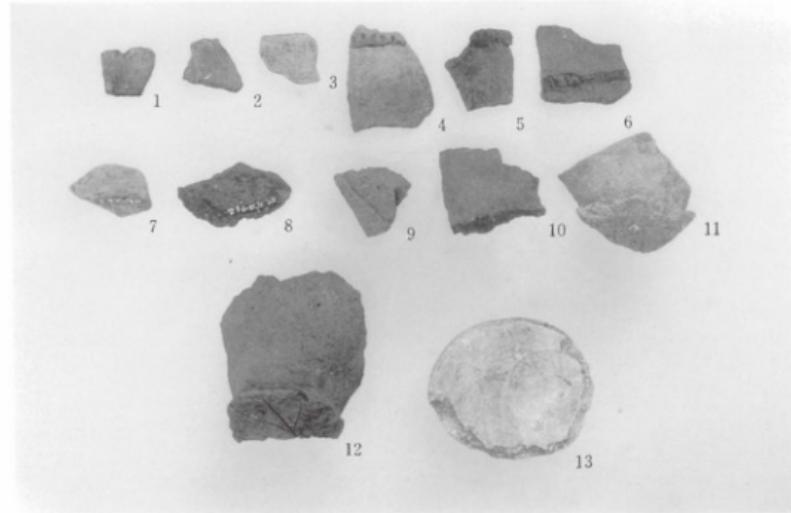
遺物出土狀況



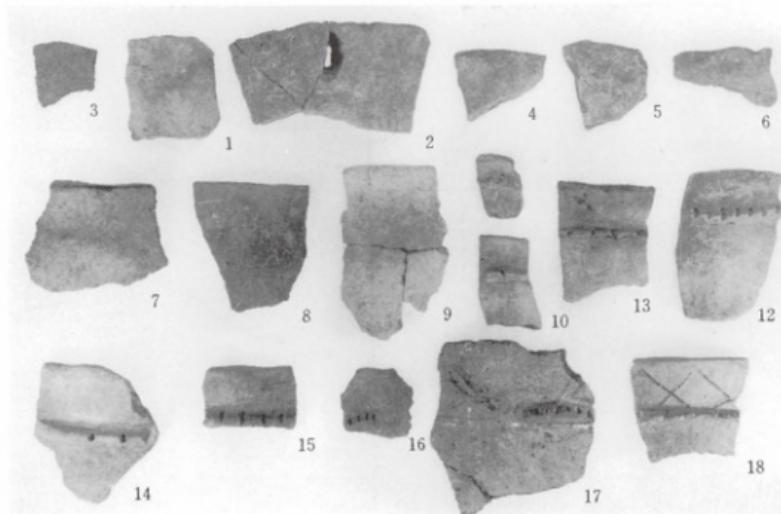
8 トレンチ出土遺物



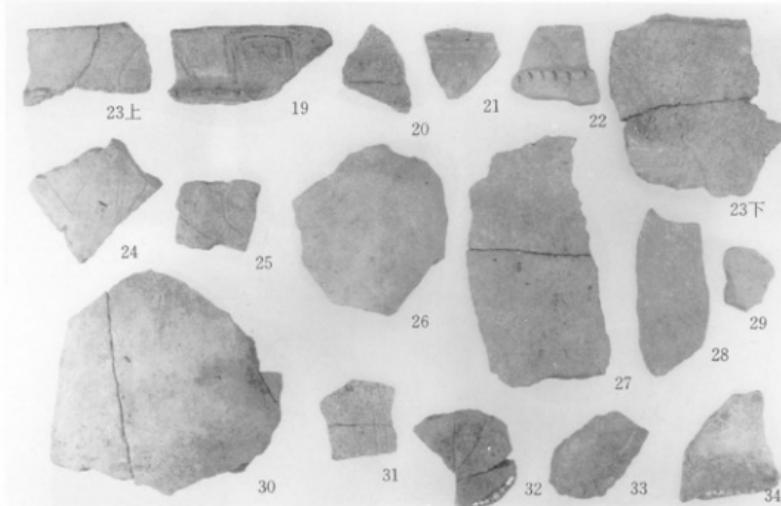
8 トレンチ出土遺物



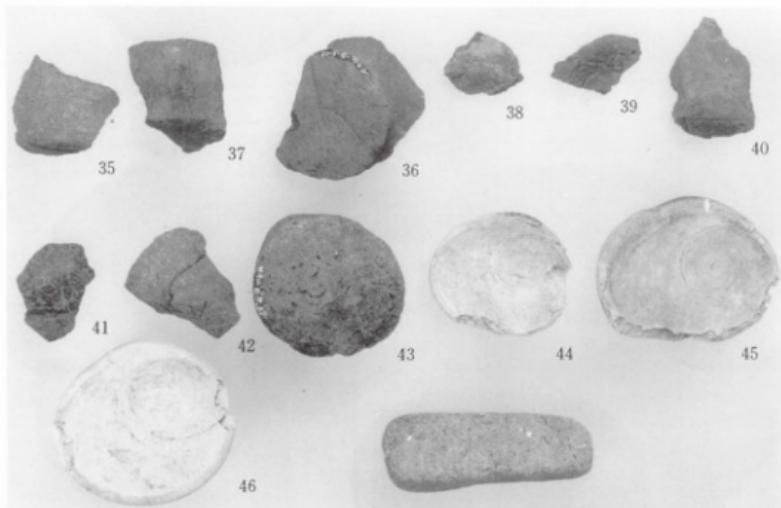
12トレンチ出土遺物



11トレンチ出土遺物



11トレンチ出土遺物



11トレンチ出土遺物



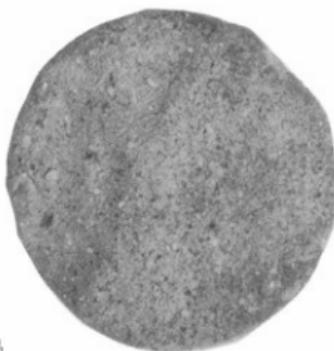
9 トレンチ



12 トレンチ



探集品



11 トレンチ



9, 11, 12 トレンチ出土遺物

喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

先　山　遺　跡

発行日 昭和62年3月

発行者 喜界町教育委員会

〒891-62 大島郡喜界町鴻61

印刷所 有限会社 朝 日 印 刷

〒892 鹿児島市上荒田町854-1

T E L 0992-51-2191